

学会活動から

地盤工学会シンボルマーク，懸賞作文選考結果報告

(社)地盤工学会広報委員会 委員長 寺師昌明

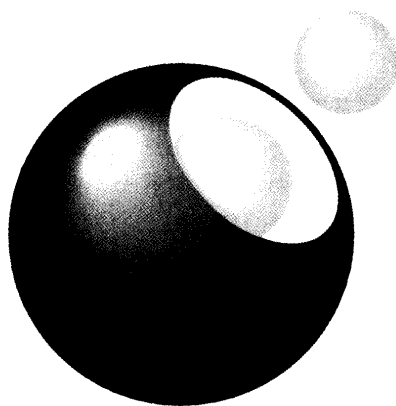
1. 「社団法人 地盤工学会」シンボルマークの選考結果

学会改名を機にシンボルマークを変更することとなり公募いたしましたところ，97名の方々から，128点の図案の応募をいただきました。

広報委員会で審査を重ね，優秀作品5点を選定し理事会へ報告，以下のとおり入選作品と佳作4作品を決定いたしました。

●入選（賞金20万円）

賀屋喜与子氏
(商業デザイナー)



Japanese Geotechnical Society

製作意図：大きな青い球体は地球をイメージし，地球に内包された未知の地質に対する探究心とそれに注ぐ技術を，二つの球体が地球から飛び出す形で表現しています。

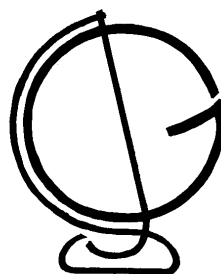
なお，入選作品につきましては，今後学会の正式のロゴマークとして各種出版物等に利用していくことになります。

会誌「土と基礎」では，1996年1月号（本号）の表紙にて採用しております。

●佳作（賞金5万円）



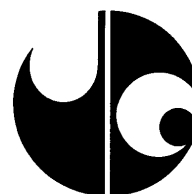
稲葉 聡氏



掛村 守氏



JGS
西谷 勲氏



大森景子氏

2. 「社団法人 地盤工学会」改名記念懸賞作文の選考結果

学会改名を機に，「地盤一ひとと地球のあいだに」をテーマに懸賞作文を公募いたしましたところ，計11件の作文の応募をいただきました。

応募いただいた作文はいずれも力作でありました。多くの作文が地球（あるいは地盤）の環境，あるいは先般の阪神大震災に代表される地盤災害を例示しつつ，今後の地盤技術者や地盤工学会の役割の大きさを指摘するものでありました。

広報委員会で審査を重ねた優秀作文3件を選定し，理事会へ報告，下記の方々の作文を入選と決定いたしました。

●1等（賞金20万円）1件

木賀一美氏
横浜高速鉄道(株)（住宅都市整備公団より出向）



●2等（賞金5万円）2件

生木泰秀氏（大阪府在住）
金光英雄氏（福岡市在住）

木賀一美氏

なお次ページに，1等入選作文を掲載いたしました。

「地盤一ひとと地球のあいだに」

木賀一美 (きが かずみ)

我が国の地盤は、特に戦後において、かつてない大きな人為的変容を経験した。すなわち、大規模な土工を伴う宅地開発や空港建設、長大な橋梁およびトンネルを擁す道路や鉄道建設、そして巨大ダムや発電所など、世界に誇る多くの建設プロジェクトが展開されてきた。これら社会資本の整備とともに、我が国は経済その他の面で大きな発展を遂げた。

しかしながら、地震・降雨災害は絶えず、兵庫県南部地震では我が国が誇る近代的な土木構造物の安全神話が崩壊し、過密都市の弱点が浮彫りにされた。都市化の進展は自然を減少させ、生産と消費の拡大は手に余る各種廃棄物を生み、地盤や地下水の汚染が進んだ。地表水や大気汚染を併せ考えると、将来の生態系の危機が懸念される。そして、広域地盤沈下はいまなお進んでいる。地盤に係る建設労働災害の発生も心を痛める問題である。

このように、地盤工学や土木技術などが進歩したとはいえ、いまだに地盤の複雑さを解明しコントロールするには至っていない。21世紀を迎えるにあたり、地盤工学の関係者は謙虚にこれらの現状を認識し、後世に汚点を残さない地盤への対応が必要である。

まず、地盤を人間のみならず広く生態系の生存母体としてとらえる観点が必要である。従来の開発を顧みると、環境問題を誘発した事例は、人間重視の姿勢に立ち、人間と地盤(＝自然)との共生に配慮を欠いたものである。21世紀においては、従来に増して大規模な構造物が計画され、地下利用もさらに促進されよう。その技術がいかに進歩しようとも、開発と自然保護の問題に終止符はあるまい。技術を過信し、いたずらに攻めの技術を駆使するのではなく、開発による生態系への影響を人類生存の問題として十分に認識し、取り組む必要がある。一方、大規模な斜面崩壊、侵食、砂漠化など、人間と生物の双方にとって好ましくない事象が多く存在する。これらに対する一層経済的で効率的かつ生態系の保全を考慮した工法を創出し、早期に措置することが求められる。

地盤は人類の共有財産である、との観点も必要である。確かに土地には個人の所有権や使用权などが与えられている。しかし、人間および生物の生命を遠い将来にわたって健全に維持するためには、土地利用や建設工事のあり方に一定の制限を付す必要がある。現今社会においても、環境アセスメント制度や公害防止法などにより一定の効果を挙げているが、地盤工学や環境工学に立脚したさらにきめ細かい規制、指導、監視を行うことが求められる。特に、汚染した地盤や地下水の浄化は技術的に難しい面が多く、莫大な資金と労力を必要とするから、未然の防止に向けて速やかな対応が要請される。

地盤は多くの物理化学的作用や人間の営力により、生き物のごとく様相を変え、崩壊や沈下など様々な現象を

生じ、生活・生産基盤はもちろん人間および生物の生命を脅かすことも多い。そこで、地盤の挙動や生態系の変化を予知・予測する技術の確立が望まれる。地盤や地下水は自然の理にかなって挙動し、そこには必ずや人間の英知によって到達できる解があると信ずる。確かに、これまでの調査技術と解析理論・手法の進歩、コンピュータの発達などが予知・予測の精度を高めてきた。しかし、同一条件の地盤、生態系が存在せず、発生頻度が少なくデータの蓄積ができない事象もあるので、分野によっては予知・予測が初歩的な段階にある。現段階で予知・予測が容易ではない分野に関しては、できるだけ大きな安全率や余裕を見込み、特に生態系には最大限の配慮を払い、一方で保護技術の進展に努めることが望まれる。

地盤および生態系に関するデータの蓄積と情報の公開も重要である。予知・予測技術を含む地盤工学の発展と、安全で経済的な工事施工のために、情報システムがさらに密で即時性に富み、相互活用が容易になることが望まれる。このため、地盤に関しては計測管理を一層綿密に行い、早期に公表すること、失敗例であっても正直に情報を提供することなどが必要である。また、地盤を大規模に変容する建設工事にあつては、生態系に関する長期的な事後調査を行い、将来に資することが望まれる。21世紀にむけて情報手段はさらに進歩すると思われ、それを最大限に活用したいものである。

土質工学会の地盤工学会への改名は、時代を反映した英断である。すでに大学など関係機関でも同様の名称を使用していると聞く。地盤工学の名にふさわしい教育、研究などが実施されるよう、組織やシステムづくりを強化しなければならない。また、地盤を人類の生存基盤として環境面を重視してとらえる視点が必要であることから、教育機関や学会などが広く国民に環境地盤に関する啓蒙を行うことが望まれる。地盤と地下水の多様性、それらと人間および生物との関係を幼少期から指導したり、折に触れて国民に正しく知らしめることは、環境共生の道を広く展開し、地球環境を守る礎になるものと考えられる。

多くの動植物が息づく豊かな自然と美しい四季に恵まれた我が国。この自然を支え、文明文化を育んできたのは大地、地盤である。「地盤」…なんと大きくて頼りがいに満ちた言葉であろうか。この地盤をとこしえに守り、多種多様な生物の種を保全し、美しい国土を維持するための道は、環境地盤への取り組みについて、地盤工学会の会員が中心となり、境界領域の専門家と協同し、地球規模での研究や討論を進めることに求められると思う。

「地盤工学の進歩は地球の危機を救う」。私はそう確信し、また21世紀に向けて環境面を重視した地盤工学が大いに発展することを期待している。